

スメラオホミクニ  
皇大御國は、掛まくも可畏き神御祖天照大御神の、御生坐る  
オホミクニ  
大御國にして、

よろずくに  
萬國に勝れたる所由は、先こゝにいちじるし。國という國に、  
ノオホミクニ  
此大御神の大御徳かゞふらぬ國あらめや。

おおごかみ  
大御神、大御手に天つ璽を捧持して、  
オホミテ  
アマ  
シルシ  
サゲモタ

御代御代に御しるしと傳はり來つる、三種の神寶は是ぞ。  
ミクサ  
カムタカラ

ヨロツチアキ  
萬千秋の長秋に、吾御子のしろしめさむ國なりと、ことよさ  
タマ  
し賜へりしまにまに、

アマツヒツギ  
天津日嗣高御座の、天地の共動かぬことは、既くこゝに定ま  
タカミクラ  
あまち  
ムタウコ  
ハヤ  
りつ。

アマモ  
天雲のむかぶすかぎり、谷墓のさわたるきはみ、皇御孫命の  
オホミラスクニ  
アメノシタ  
大御食國とさだまりて、天下にはあらぶる神もなく、まつろ  
わぬ人もなく、

いく萬代を経とも、誰しの奴か、大皇に背き奉む。あなか  
ヤツコ  
オホキミ  
ソム  
マツラ  
しこ、御代御代の間に、たまたまも上伏惡穢奴もあれば、  
フルコト  
マツロハスキタナヤツコ  
神代の古事のまにまに、大御稜威をかゞやかして、たちまち  
ホロボ  
にうち滅し給ふ物ぞ。

チヨロヅミヨ  
千萬御世の御末の御代まで、天皇命はしも、大御神の御子と  
ミスエ  
スメラミコト  
ましまして、  
おおおがみ  
ミミコ

スメラギ  
御世御世の天皇は、すなわち天照大御神の御子になも大座ま  
あまてらすおお  
オホマシ  
す。故天つ神の御子とも、日の御子ともまをせり。  
カレアマ

アマ  
天つ神の御子は大御心として、

ナニ  
何わざも、己命の御心もてさかしだち賜はずて、たゞ神代  
オノレミコト  
フルコト  
の古事のまにまに、おこなひたまひ治め賜ひて、疑ひおもほ  
ミクフラコト  
す事しあるをりは、御卜事もて、天神の御心を問して物し給  
ツクウ  
トハ  
ふ。

● 神代も今もへだてなく、

アマツヒツギ  
たゞ天津日嗣の然ましますのみならず、臣連八十伴緒にいた  
シカ  
オミムラジャヤソトモノラ  
るまで、氏かばねを重みして子孫の八十續、その家々の職業  
ウチ  
ウミノコ  
ヤソツギ  
イヘイヘ  
をうけつがひつゝ、祖神たちに異ならず、只一世の如くにし  
オヤカミ  
コト  
タツヒトヨ

て、神代のまゝに奉仕れり。

神ながら安國と、平けく所知看しける大御國になもありければ、

書記の難波長柄朝廷御巻に、惟神者、

謂隨神道亦自有神道 也とあるを、よく思ふべし。

神道に隨ふとは、天下治め賜ふ御しわざは、たゞ神代より有こしまにまに物し賜ひて、いさゝかもさかしらを加へ給ふことなきをいふ。さてしか神代のまにまに、大らかに所知看せば、おのづから神の道はたらひて、他にもとむべきことなきを、自有神道 とはいふなりけり。かれ現御神と大八洲國しろしめすと申すも、其御世々々の天皇の御政、やがて神の御政なる意なり。萬葉集の哥などに、神隨云々とあるも、同じこゝろぞ、神國と韓人の申せりしも、諾にぞ有ける。

古の大御世には、道といふ言擧もさらになかりき。

故古語に、あしはらの水穂の國は、神ながら言擧せぬ國といへり。

其はたゞ物にゆく道こそ有けれ。

美知とは、古事記に味御路と書る如く、山路野路などの路に、御てふ言を添たるにて、たゞ物にゆく路ぞ。これをおきては、上代に、道といふものはなかりしぞかし。

物のことわりあるべきすべ、萬の教へごとをしも、何の道くれの道といふことは、異國のさだなり。

異國は、天照大御神の御國にあらざるが故に、定まれる主なくして、狹蠅なす神ところを得て、あらぶるによりて、人心あしく、ならはしみだりがはしくして、國をし取つれば、賤しき奴も、たちまちに君ともなれば、上とある人は、下なる人に奪はれじとかまへ、下なるは、上のひまをうかゞひて、うばゝむとはかりて、かたみに仇みつゝ、古より國治まりがたくなも有ける。其が中に、威力あり智り深くて、人をなつけ、人の國を奪ひ取て、又人にうばはるまじき事をよくして、しばし國をよく治めて、後の法ともなしたる人を、もろこしには聖人とぞ云なる。たとへば、亂れたる世には、戦にならふゆゑに、おのづから 吊將 おほくいであるが如く、國の風俗あしくして、治まりがたきを、あながちに治めむとするから、世々にそのすべをさまざま思ひめぐらし、爲むならひたるゆゑに、しかかしくき人どももいできつるなりけり。然るをこの聖人といふものは、神のごとよにすぐれて、おのづからに奇しき徳あるものと思ふは、ひがことなり。さて其

聖人どもの作りかまへて、定めおきつることをなも、道とはいふなる。かゝれば、からくにゝして道といふ物も、其旨をきはむれば、たゞ人の國をうばはむがためと、人に奪はるまじきかまへとの、一にはすぎずなもある。そもそも人の國を奪ひ取むとはかるには、よろづに心をくだき、身をくるしめつゝ、善ことのかぎりをして、諸人をなつけたる故に、聖人はまことに善人めきて聞え、又そのつくりおきつる道のさまも、うるはしくよろづにたらひて、めでたくは見ゆめれども、まづ己からその道に背きて、君をほろぼし、國をうばへるものにしあれば、みないつはりにて、まことはよき人にあらず。いともいとも惡き人なりけり。もとよりしか穢惡き心もて作りて、人をあざむく道なるけにや、後人も、うはべこそたふとみしたがひがほにもてなすめれど、まことには一人も守りつとむる人なければ、國のたすけとなることもなく、其吊のみひろごりて、つひに世に行はるゝことなくて、聖人の道は、たゞいたづらに、人をそしる世々の儒者どもの、さへづりぐさとぞなれりける。然るに儒者の、たゞ六經などいふ書をもみとらへて、彼國をしも、道正しき國ぞと、いひのゝしるは、いたくたがへることなり。かく道といふことを作りて正すは、もと道の正しからぬが故のわざなるを、かへりてたけきことに思ひいふこそをこなれ。そも後人、此道のまゝに行なはゞこそあらめ、さる人は、よゝに一人だに有がたきことは、かの國の世々の史どもを見てもしるき物をや。さて其道といふ

物のさまは、いかなるぞといへば、仁義禮讓孝悌忠信などいふ、こちたき吊どもを、くさぐさ作り設て、人をきびしく教へおもむけむとぞすなる。さるは後世の法律を、先王の道にそむけりとて、儒者はもしれども、先王の道も、古の法律なるものをや。また易などいふ物をさへ作りて、いともこゝろふかげにいひなして、天地の理をきはめつくしたりと思ふよ。これはた世人をなづけ治めむための、たばかり事ぞ。そもそも天地のことわりはしも、すべて神の御所爲にして、いともいとも妙に奇しく、靈しきものにしあれば、さらに人のかぎりある智りもては、測りがたきわざなるを、いかでかよくきわめつくして知ることのあらむ。然るに聖人のいへる言をば、何ごととたゞ理の至極と、信たふとみをこそいと愚なれ。かくてその聖人どもの仕業にならひて、後々の人どもゝ、よろづのことを、己がさとりもておしはかりごとするぞ、彼國のくせなる。大御國の物學びせむ人、是をよく心得をりて、ゆめから人の説になまどはされそ。すべて彼國は、事毎にあまりこまかに心を着て、かにかくに論ひさだむる故に、なべて人の心さかしだち惡くなりて、中々に事をしゝこらかしつゝ、いよいよ國は治まりがたくのみなりゆくめり。されば聖人の道は、國を治めむために作りて、かへりて國を亂すたねともなる物ぞ。すべて何わざも、大らかにして事足ぬることとは、さてあるこそよけれ。故皇國の古は、さる言痛さ教も何もなかりしかど、下が下までみだるゝことなく、天下は穩に

治まりて、天津日継いや遠長に傳はり來坐り。さればかの異國の吊にならひていはゞ、是ぞ上もなき優たる大き道にして、實は道あるが故に道てふ言なく、道てふことなけれど、道ありしなりけり。それをことごとしくいひあぐると、然らぬものけぢめを思へ。言擧せずとは、あだし國のごと、こちたく言たつることなきを云なり。譬ば才も何も、すぐれたる人はいひたてぬを、なまなまのわるものぞ、返りていさゝかの事を、ことごとしく言あげつゝほこるめる如く、漢國などは、道ともしきゆゑに、かへりて道々しきことをのみ云あへるなり。儒者はこゝをえしらで、皇國をしも、道なしとかるしむるよ。儒者のえしらぬは、萬に漢を尊き物に思へる心は、なほさも有なむを、此方の物知人さへに、是をえさとらずて、かの道てふことある漢國をうらやみて、強てこゝにも道ありと、あらぬことゞもをいひつゝ争ふは、たとへば、猿どもの人を見て、毛なきぞとわらふを、人の恥て、おのれも毛はある物をといひて、こまかなるをしひて求出て見せて、あらそふが如し。毛は無きが貴きをしらぬ、癡人のしわざにあらずや。

然るをや、降りて、書籍といふ物渡參來て、其を學びよむ事始まりて後、其國のてぶりをならひて、やゝ萬のうへにまじへ用ひられる、御代になりてぞ、大御國の古の大御てぶりをば、取別て神道とはなづけられたりける。そはかの外國の道々に

まがふがゆゑに、神といひ、又かの吊を借りて、こゝにも道とはいふなりけり。

神の道としもいふ所由は、下につばらかにとく。

しかありて御代々々を経るまゝに、いやますますに、その漢國のてぶりをしたひまねぶこと、盛にありもてゆきつゝ、つひに天の下所知看す大御政も、もはら漢様に爲はてゝ、

難波の長柄宮、淡海の大津宮のほどに至りて、天の下の御制度も、みな漢になりき。かくて後は、古の御てぶりは、たゞ神事にのみ用ひ賜へり。故後代までも、神事にのみは、皇のてぶりの、なほのこれることおほきぞかし。

青人草の心までぞ、其意にうつりにける。

天皇尊の大御心を心とせずして、己々がさかしらごころを心とするは、漢意の移れるなり。

さてこそ安けく平けく有來し御國の、みだりがはしきこといできつゝ、異國にやゝ似たることも、後にはまじりきにけれ。

いともめでたき大御國の道をおきながら、他國のさかしく言痛

き意行<sup>コ、ロシワザ</sup>を、よきこととして、ならひまねべるから、直<sup>ナホ</sup>く清<sup>キヨ</sup>かりし心<sup>ココロ</sup>も行<sup>オコナ</sup>ひも、みな穢<sup>キスナ</sup>悪くまがりゆきて、後<sup>ヒト</sup>つひには、かの他國<sup>ヒトクニ</sup>のきびしき道ならずては、治まりがたきが如くなれるぞかし。さる後のありさまを見て、聖人の道ならずては、國は治まりがたき物ぞと思ふめるは、しか治まりがたくなりぬるは、もと聖人の道の蔽<sup>ツミ</sup>なることを、えさとらぬなり。古の大御代に、其道をからずて、いとよく治まりしを思へ。そもそも此天地<sup>ノアメツチ</sup>のあひだに、有<sup>リ</sup>とある事は、悉<sup>コトゴト</sup>皆に神の御心なる中に、

凡て此世<sup>ノ</sup>中の事は、春秋のゆきかわり、雨ふり風ふくたぐひ、又國<sup>ノ</sup>のうへ人のうへの、吉凶<sup>ヨキアン</sup>き萬事<sup>ノ</sup>、みなことごとくに神の御所<sup>ミソ</sup>爲なり。さて神には、善<sup>ヨキ</sup>もあり惡<sup>アシ</sup>きも有て、所行<sup>シヨウザ</sup>もそれにしたがふなれば、大かた尋常<sup>ヨノツネ</sup>のことわりを以ては、測<sup>ハカ</sup>りがたきわざなりかし。然るを世人<sup>ノ</sup>、かしこきもおろかなるものしなべて、外國<sup>トクニ</sup>の道々の説<sup>コト</sup>にのみ惑<sup>マド</sup>ひはて、此意<sup>ノ</sup>をえしらず、皇國<sup>モノマシ</sup>の學門<sup>モノマシ</sup>する人などは、古書<sup>イニシヘノフミ</sup>を見て、必知<sup>ズル</sup>べきわざなるを、さる人もだに、えわきまへ知<sup>ラ</sup>ざるは、いかにぞや。抑<sup>ヨシ</sup>凶<sup>アン</sup>き萬<sup>ノ</sup>の事を、あだし國にて、佛の道には因果とし、漢<sup>カラ</sup>の道々には天命といひて、天のなすわざと思へり。これらみなひがことなり。そが中に佛道説<sup>ノコト</sup>は、多く世の學者<sup>モノマナフヒト</sup>の、よく辨<sup>ワカ</sup>へつることなれば、今いはず。漢國<sup>カラクニ</sup>の天命の説<sup>コト</sup>は、かし

こき人もみな惑<sup>マド</sup>ひて、いまだひがことなることをさとれる人なければ、今これを論<sup>アゲツラ</sup>ひさとさむ。抑天命といふことは、彼國にて古に、君を滅<sup>ホロボ</sup>し國を奪<sup>ウバ</sup>ひし聖人の、己<sup>オノ</sup>が罪をのがれむために、かまへ出<sup>イデ</sup>たる託言<sup>コトツケコト</sup>なり。まことには、天地は心ある物にあらざれば、命<sup>メイ</sup>あるべくもあらず、もしまことに天に心あり、理<sup>コトワリ</sup>もありて、善人<sup>ヨキヒト</sup>に國を與<sup>アタ</sup>へて、よく治めしめむとならば、周の代のはてかたにも、必<sup>ズ</sup>又聖人は出ぬべきを、さもあらざりしはいかにぞ、もし周公孔子にして、既に道は備<sup>ソナ</sup>れる故に、其後は聖人を出さずといはむも、又心得ず。かの孔丘が後、其道あまなく世に行はれて、國よく治まりたらむにこそさもいはめ。其後しもいよ其道<sup>ノ</sup>はすたれはて、徒言<sup>イタツラゴト</sup>となり、國もますますみだれつる物を、今はたれりとして、聖人をも出さず、國の厄<sup>マガ</sup>をもかへりみず、つひに秦<sup>シ</sup>始皇<sup>ノ</sup>がごと荒<sup>アラ</sup>ぶる人にしも與<sup>アタ</sup>へて、人草<sup>ヒトクサ</sup>を苦<sup>クル</sup>しめしは、いかなる天のひがこゝろぞ。いといといぶかし。始皇などは、天のあたへしに非る故に、久しくはえたもたず、ともいひ枉<sup>マダ</sup>げれど、そも暫<sup>シバラク</sup>にても、さる惡人<sup>アシキヒト</sup>にあたふべき理あらめやも。又國をしる君のうへに、天命のあらば、下なる諸人<sup>モロヒト</sup>のうへにも、善惡<sup>ヨシアシ</sup>きしるしを見せて、善人<sup>ヨキ</sup>はながく福<sup>サカ</sup>え、惡人<sup>アシキ</sup>は速<sup>スミヤ</sup>けく禍<sup>マガ</sup>るべき理なるを、さはあらずて、よき人も凶<sup>アシ</sup>く、あしき人も吉<sup>ヨ</sup>きたぐひ、昔<sup>ムカシ</sup>も今も多かるはいかに。もしまことに天のしわざならましかば、さるひがことはあらまじや。さて後世になりては、やうやく人心さかしきゆゑに、國を奪<sup>ウバ</sup>ひて天

命ぞといふをば、世人の諾なはねば、うはべは禪らせて取こともあるをば、よからぬことにいふめれど、かの古の聖人どもも、實は是に異ならぬ物をや。後世の王の天命ぞといふをば、信ぬものゝ、古人の天命をば、まことゝ心得るは、いかなるまどひぞも。古は天命ありて、後にはなきこそをかしけれ。或人、舜は堯が國をうばひ、禹も又舜が國を奪へりしなりといへるも、さも有べきことぞ。後世の王莽曹操がたぐひも、うはべはゆづりを受て嗣つれども、實は篡へるを以て思へば、舜禹などもさぞありけむを、上代は朴にして、禪れりと云なせるを、まことゝ心得て、國內の人ども、みなあざむかれにけらし。かの莽操がころは、世人さかしくて、あざむかれざりし故に、惡きしわざのあらはれけむ。かれらが如くなる輩も、上代ならなしかば、あはれ聖人と仰がれなましものを。

禍津日神の御心のあらびはしも、せむすべなく、いとも悲しきわざにぞありける。

世間に、物あしくそこなひなど、凡て何事も、正しき理のまゝにはえあらずて、邪なることも多かるは、皆此神の御心にして、甚く荒び坐時は、天照大御神高木大神の大御力にも、制みかね賜ふをりもあれば、まして人の力には、いかにともせむすべなし。かの善人も禍り、惡人も福ゆるたぐひ、尋常の理

にさかへる事の多かるも、此神の所爲なるを、外國には、神代の正しき傳説なくして、此所由をえしらざるが故に、たゞ天命の説を立て、何事もみな、當然理を以て定めむとするこそ、いとをこなれ。

然れども、天照大御神高天原に大坐々て、大御光はいさゝかも曇りまさず、此世を御照しまし、天津御璽はた、はふれまさず傳はり坐て、事依し賜ひしまにまに、天の下は御孫命の所知食て、

異國は、本より主の定まれるがなければ、たゞ人もたちまち王になり、王もたちまちたゞ人にもなり、亡びうせもする、古よりの風俗なり。さて國を取むと謀りて、えとらざる者をば、賊といひて賤しめにくみ、取得たる者をば、聖人といひて尊み仰ぐめり。さればいはゆる聖人も、たゞ賊の爲とげたる者にぞ有ける。掛けまくも可畏きや吾天皇尊はしも、然るいやしき國々の王どもと、等なみには坐まさず。此御國を生成たまへる。神祖命の、御みづから授賜へる皇統にましまして、天地の始より、大御食國と定まりたる天下にして、大御神の大命にも、天皇惡く坐まさば、莫まつろひそとは詔たまわすあれば、善く坐むも惡く坐むも、側よりうかゞひはかり奉ることあたはず。天地のあるきはみ、月日の照す限は、いく萬代を経て、動き坐ぬ大君に坐り、故古語にも、當代

の天皇をしも、神と申して、實に神にし坐ませば、善惡き御うへの論ひをすて、ひたぶるに畏み敬ひ奉仕ぞ、まことの道には有ける。然るを中ごろの世のみだれに、此道に背きて、畏くも大朝廷に射向ひて、天皇尊をなやまし奉れりし、北條義時奉時、又足利尊氏などが如きは、あなかしこ、天照大御神の大御蔭をもおもひはからざる、穢惡き賊奴どもなりけるに、禍津日神の心はあやしき物にて、世人のなびき従ひて、子孫の末まで、しばらく榮え居しことよ。抑此世を御照し坐ます天津日神をば、必たふとみ奉るべきことをしれども、天皇を必畏こみ奉るべきことをば、しらぬ奴もよにありけるは、漢藉意にまどひて、彼國のみだりなる風俗を、かしこきことにおもひて、正しき皇國の道をえしらず、今世を照します天津日神、即天照大御神にましますことを信ず、今の天皇、すなわち天照大御神の御子に坐ますことを忘れたるにこそ。

### 天津日嗣の高御座は、

天皇の御統を日嗣と申すは、日神の御心を御心として、其御業を嗣坐が故なり。又その御坐を高御坐と申すは、唯に高き由のみにあらず、日神の御座なるが故なり。日には、高照とも高日とも日高とも申す古語のあるを思へ。さて日神の御坐を、次々に受傳へ坐て、其御坐に大坐ます天皇命にませば、日神

に等く坐こと決し。かゝれば、天津日神のおほみうつくしみを蒙らむ者は、誰しか天皇命には、可畏み敬び尊みて、奉仕らざらむ。

あめつちのむた、ときはにかきはに動く世なきぞ、此道の靈く奇く、異國の萬の道にすぐれて、正しき高き貴き徴なりける。

漢國などは、道はなきが故に、もとよりみだりなるが、世々にますます亂れて、終には傍の國人に、國はことごとくうばはれはてぬ、其は夷狄といひて卑めつ、人のごともおもへらざりしものなれども、いきほひつよくして、うばひ取つれば、せむすべなく天子といひて、仰ぎ居るなるは、いともいともあさましきありさまならずや。かくても儒者はなほよき國とやおもふらむ。王のみならず、おほかた貴きいやしき統さだまらず、周といひし代までは、封建の制とかいひて、此別ありしがごとなれど、それも王の統かはれば、下までも共にかはりつれば、まことは別なし。秦よりこなたは、いよ、此道たゞず、みだりにして、賤き奴の女も、君の寵のまにまに、忽ち後の位にのぼり、王の女をも、すちなき男にあはせて、恥ともおもへらず。又昨日まで山賊なりし者も、今日にははかに、國の政とる高官にもななり登るたぐひ、凡て貴賤き品さだまらず、鳥獸のありさまに異ならずなもあ

りける。

そも此道は、いかなる道ぞと尋ぬるに、天地のおのづからなる道にもあらず、

是をよく辨別て、かの漢國の老莊などが見と、ひとつにな思ひまがへそ。

人の作れる道にもあらず、此道はしも、可畏きや高御産巢日神の御霊によりて、

世中にあらゆる事も物も、皆悉に此大神にみたまより成れり。

神祖伊邪那岐大神伊邪那美大神の始めたひて、

よのなかにあらゆる事も物も、此二柱大神よりはじまれり。

天照大御神の受たまひたまひ、伝へ賜ふ道なり。故是以神の道とは申すぞかし。

神道と申す吊は、書紀の石村池邊宮の御卷に、始めて見えたり。されど其は只、神をいつき祭りたまふことをさして云る

なり。さて難波長柄宮の御卷に、惟神者謂隨神道亦自有神道也とあるぞ、まさしく皇國の道を廣くさしていへる始めなりける。さて其由は、上に引ていへるが如くなれば、其道といひて、ことなる行ひのあるにあらず、さればたゞ神をいつき祭りたまふことをいはむも、いひもてゆけば一むねにあたれり。然るを、からぶみに、聖人設神道、といふ言あるを取て、此方にも吊づけたりなどいふめるは、ことのこゝろしらぬみだり言なり。其故は、まづ神とさすもの、此と彼と始めより同じからず、かの國にしては、いはゆる天地陰陽の、上測く靈きをさしていふめれば、たゞ空き理のみにして、たとかに其物あるにあらず。さて皇國の神は、今の現に御宇天皇の皇祖に坐て、さらにかの空き理をいふ類にはあらず。さればかの漢籍なる神道は、上測くあやしき道といふこゝろ、皇國の神道は、皇祖神の、始め賜ひたまひ賜ふ道といふことにて、其意いたく異なるをや。

さて其道の意は、古事記をはじめ、もろもろの古書どもをよく味ひみれば、今もいとよくしらるゝを、世々のものしりびとゞもの心も、みな禍津日神にまじこりて、たゞからぶみにのみ惑ひて、思ひとおもひいひといふことは、みな仏と漢との意にして、まことの道のこゝろをば、えさとらずなもある。

古は道といふ言云擧げなかりし故に、古書どもに、つゆばか

りも道々しき意も語もみえず。故舊人親王を始め奉て、世々の識者ども、道の意をえとらへす、たゞかの道々しきことこちたく云る、から書の説のみ、心の底にしみ着て、其を天地のおのづからなる理と思居る故に、すぐるとは思はねども、おのづからそれにまつはれて、彼方へのみ流れゆくめり。されば異國アダシクニの道を、道の羽翼となるべき物と思ふも、即其心のかしこへ奪はれつるなりけり。大かた漢國の説は、かの陰陽乾坤などをはじめ、諸皆、もと聖人どもの己が智をもて、おしはかりに作りかまへたる物なれば、うち聞には、ことわり深げにきこゆめれども、彼が垣内を離れて、外よりよく見れば、何ばかりのこともなく、中には浅はかなることゞもなりかし。されと昔も今も世人の、此垣内に迷入て、得出離れぬこそくちをしけれ。大御國オホミクニの説は、神代より傳へ來しまゝにして、いさゝかも人のさかしらを加へざる故に、うはべはたゞ浅々と聞ゆれども、實にはそこひもなく、人の智の得測度ぬ、深き妙なる理のこもれるを、其意をえしらぬは、かの漢國書の垣内にまよひ居る故なり。此をいではなれざらむほどは、たとひ百年千年の力をつくして、物學ぶとも、道のためには、何の★もなきいたづらわざならむかし。但し古書は、みな漢文にうつして書たれば、彼國のことも、一わたりは知りてあるべく、文字のことなどしらむためには、漢籍をも、いとまあらば學びつへし。皇國魂の定まりて、たゞよはぬうへにては、害はなきものぞ。

故おのが身々に受行ふべき神道の教などいひて、くさぐさものすなるも、みなかの道々のをしへごとをうらやみて、近き世にかまへ出たるわたくしごとなり。

ことごとしく祕説など云て、人えりして密に傳ふる類など、皆後世に偽造れることぞ。凡てよきことは、いかにもいかにも世に廣まるこそよけれ。ひめかくして、あまねく人に知せず、己が私物にせむとするは、いとこゝろぎたなきわざなりかし。

あなかしこ、天皇スメラギの天下しろしめす道を、下が下として、己がわたくしの物とせむことよ。

下なる者は、かにもかくにもたゞ上のおもめくに従ひ居るこそ、道にはかなへれ。たとへ神の道の行ひの、別にあらむにても、其を教へ學びて、別に行ひたらむは、上にしたががはぬ私事ならずや。

人はみな、産巢日神の御靈によりて、生れつるまにまに、身にあるべきかぎりの行は、おのづから知りてよく爲る物にしあれば、

世中に生としいける物、鳥蟲に至るまでも、己が身のほどほどに、必あるべきかぎりのわざは、産巢日神のみたまに頼て、おのづからよく知てなすものなる中にも、人は殊にすぐれたる物とうまれれば、又しか勝れたるほどにかなひて、知べきかぎりはしり、すべきかぎりはする物なるに、いかでか其上をなほ強ることのあらむ。教によらずては、えしらずえせぬものとはいはざなれば、あるべき限は、教をからざれども、おのづからよく知てなすことなるに、かの聖人の道は、もと治まりがたき國を、いひてをさめむとして作れる物にて、人の必有べき限りを過て、なほきびしく教へたてむとせる強事なれば、まことの道にはかなはず。故口には人みなことごとしく言ながら、まことに然行ふ人は、世々にいと有がたきを、天理のまゝなる道と思ふは、いたくたがへり。又其道にそむける心を、人欲といひてにくむも、こゝろえず。そもそもその人欲といふ物はいづくよりいかなる故にていできつるぞ、それも然るべき理にてこそは、出來たるべければ、人欲も即天理ならずや。又百世を経て、同姓どち婚することゆるさずといふ制など、かの國にしても上代より然るにはあらず、周の代のさだめなり。かくきびしく定めたる故は、國の俗あしくして、親子同母兄弟などの間にも、みだりなる事のみ常多くて、別なく治まりがたかりし故なれば、かゝる制のきびしきは、かへりて國の恥なるをや。すべて何の上にも、法の嚴きは、犯すものの多きがゆゑぞかし。さて其制は制と立

しかども、まことの道にあらず、人の情にかなはぬことなる故に、したがつ人いといとまれなり。後々はさらにもいはず、はやく周の代のほどにすら、諸侯といふきはの者も、これを破れるが多ければ、ましてつぎつぎはしられたり。姉妹などにさへ、けし例もある物をや。然るを儒者<sup>ズサ</sup>どもの、昔よりかく世人の守りあへぬことをば忘れて、いたづらなるさだめのみをとらへて、たけきことにいひ思ひ、又皇國をしひて賤しめむとして、ともすれば、古兄弟まぐはひせしことをいひ出て、鳥獸のふるまひぞとそしるを、此方の物知人たちも、是をばこころよからず、御國のあかぬことに思ひて、かにかくにいひまぎらはしつゝ、いまださだかに斷り説ることもなきは、かの聖人のさかしらを、かならず當然理と思ひなづみて、なほ彼にへつらふ心あるがゆゑなり。もしへつらふころしなくば、彼と同じからぬは、なにごとかあらむ。抑皇國の古は、たゞ同母兄弟をのみ嫌ひて、異母の兄弟など御合坐しことは、天皇<sup>スメラギ</sup>を始め奉て、おほかたのよのつねにして、今京になりてのこなたまでも、すべて忌ことなかりき。但し貴き賤きへだては、うるはしく有て、おのづからみだりならざりけり。これぞこの神祖の定め賜へる、正しき眞の道なりける。然るを後世には、かのから國のさだめを、いささかばかり守るげにて、異母なるをも兄弟と云て、婚せぬことになも定まりぬる。されば今世にして、其を犯さむこさ惡からめ、古は古の定まりにしあれば、異國<sup>アマノクニ</sup>の制を規として、論ふべき

ことにあらず。

いにしへの大御代には、しもがしもまで、たゞ<sup>スメラギ</sup>天皇の大御心を心として、

<sup>スメラギ</sup>天皇の所思看御心のまにまに奉任て、己が私心はつゆなかりき。

ひたぶるに大命をかしこみぬやひまつろひて、おほみうつくしみの御蔭にかくろひて、おのおの祖神を齋祭つゝ、

<sup>スメラギ</sup>天皇の、大御皇祖神の御前を拜祭坐がごとく、臣聯八十伴緒、天下の百姓に至るまで、各祖神を祭るは常にて、又<sup>スメラギ</sup>天皇の、朝廷のため天下のために、天神國神諸をも祭坐が如く、下なる人ども、事にふれては、福を求むと、善神にこひねぎ、禍をのがれむと、惡神をも和め祭り、又偶々身に罪穢もあれば、祓清むるなど、みな人の情にして、かならず有べきわざなり。然るを、心だにまことの道にかなひなば、など云めるすぢは、佛の教へ儒の見到こそ、さる事もあらめ、神の道には、甚くそむけり。又<sup>アヂシクニ</sup>異國には、神を祭るにも、たゞ理を先にしてさまざま議論あり。淫祀など云て、いましむる事もある、みなさかしらなり。凡て神は、佛などいふなる物の趣とは異にして、善神のみにはあらず、惡きも有て、心も所行も、

然ある物なれば、惡きわざする人も福え、善事する人も、禍る事ある、よのつねなり。されば神は、理の富上をもて、思ひはかるべきものにあらず、たゞ其の御怒を畏みて、ひたぶるにいつきまつるべきなり。されば祭るにも、其のこゝろばへ有て、如何にも其神の歡喜び坐べきわざをなも爲べき。そはまづ萬を齊忌清まはりて、穢惡あらせず、堪たる限美好物多に獻り、或は琴ひき笛ふき歌ふひなど、おもしろきわざをして祭る、此れみな神代の例にして、古のみちなり。然るをたゞ心の至り至らぬをのみいひて、獻る物にもなすわざにもかゝはらぬは、漢意のひがこと成り。扱て又神を祭るには、何わざよりも先火を重く忌清むべきこと、神代書の黄泉段を見て知べし。是は神事のみにもあらず、大かた常にもつゝしむべく、かならずみだりにすまじきわざなり。若し火穢るときは、禍津日神ところをえて、荒び坐ゆゑに、世中に萬の禍事はおこるぞかし、かゝれば世のため民のためにも、なべて天下に、火の穢は忌まほしきわざなり。今の代には、唯神事のをり、又神の坐地などにこそ、かつかつも此忌は物すめれ。なべては然る事さならなきは、火の穢れなどいふをば、愚なる事々とおもふ、なまさかしらなる漢意のひろこれるなり。かくて神御典を釋誨ゆる世々の識者たちすら、たゞ漢意の理をのみ、うるさきまで物して、此忌の説をしも、なほざりにすめるは、如何にぞや。

ほどほどにあるべきかぎりのわざをして、穏しく楽しく世をわたらふほかなかりしかば、

かくあるほかに、何の教ごとをかもまたむ。抑みどり兒に物教へ、又諸匠の物造るすべ、其外よろづの伎藝などを教ふることは、上代にも有けむを、かの儒佛などの教事も、いひもてゆけば、これらと異なることなきに似たれども、よく辨ふれば、おなじからざることぞかし。

今はた其道といひて、別に教を受けて、おこなふべきわざはありなむや。

然らば神の道は、からくにの老莊が意にひとしかきかと、或人の疑ひ問へるに、答けらく、かの老老莊がともは儒者<sup>ズサ</sup>のさかしらをうるさみて、自然なるをたふとめば、おのづから似たることもあり。されどかれらも、大御神の御國ならぬ、惡國に生れて、たゞ代々の聖人の説をのみ聞なれたるものなれば、自然なりと思ふも、なほ聖人の意おのづからなるにこそあれ。よろづの事は、神の御心より出て、その御所爲なることをしも、えしらねば、大旨の甚くたがへる物をや。

もししひて求むとならば、きたなきからぶみごゝろを祓ひきよめて、清々しき御國ごゝろもて、古典どもをよく学びてよ。

然せば、受行べき道なきことは、おのづから知てむ。其をしるぞ、すなはち神の道をうけおこなふにはありける。かゝれば如此まで論ふも、道の意にはあらねども、禍津日神のみしわざ、見つゝ黙止えあらず、神直毘神大直毘神の御靈たばりて、このまがをもて直さむとぞよ。

上の件、すべて己が私のこゝろもていふにあらず。ことごとくに古典に、よるところあることにしあれば、よく見む人は疑はじ。

かくいふは、明和の八年といふとしの、かみな月の九日の日、伊勢国飯高郡の御民、平阿曾美宣長、かしこみかしこみしるす。

もとりのりが  
本居宣長